

清貧の書

林芙美子

青空文庫

一

私はもう長い間、一人で住みたいと云う事を願つて暮した。古里も、古里の家族達たちの事も忘れ果てて今なお私の戸籍こせきの上は、真白いままで遠い肉親の記憶きおくの中から薄れうすかけようとしている。

ただひとり母だけは、跌つまずき勝ちな私に度々手紙をくれて叱しかつて云う事は、――

おまえは、おかあさんでも、おとこうんがわるうて、くろうしている、ふてくされてみえるが、よう、むねにてをあててか

んがえてみい。しつかりものじゃ、ゆうて、おまえを、しんようしていても、そうそう、おとこさんのなまえがちごうては、わしもくるしいけに、さっち五円おくつてくれとあつたが、ばばさがしんで、そうれんもだされんのを、しつてであらう。あんなひとじゃけに、おとうさんも、ほんのこて、しんぼうしなはつて、このごろは、めしのうえに、しよおゆうかけた、べんとうだけもつて、かいへいだんに、せきたんはこびにいつておんなはる、五円なおくれんけん、二円ばいれとく、しんぼうしなはい。てがみかくのも、いちんちがかりで、あたまがいとうなる。かえろうごとあつたら、二人でもどんなさい。

はは。

ひなたくさい母の手紙を取り出しは、なみだ涙をじくじくこぼし、
「誰だれがかえってやるもんか、田舎いなかへ帰っても飯が満足に食えんの
に……今に見い」私は母の手紙の中の、義父がしょうゆ醤油をかけた弁当
を持つて毎日海兵团へ働きに行っていると云う事が、一番胸に
こたえた。——もう東京に来て四年にもなる。さして遠い過去で
はない。

私は、その四年の間に三人の男の妻となった。いまの、その三
人目の男は、私の気質から云えばひどく正反对で、へいほん平凡で誇こちよ
張うのない男であつた。たとえて云えば、「また引越ひっこしをされた
ようですが、今度は、淋さびしいところらしいですね」このように、

誰かが私達に聞いてくれるとすると、私はいつものように^{たの}樂し氣に「ええこんなに、そう、何千株と躑躅^{つづじ}の植っているお邸^{やしき}のようなどころです」と、私は両手を^{ひろ}拡げて、何千株の躑躅がいかに美しいかと云う事を表現するのに苦心をする。それであるのに、三人目の男はとんでもなく白^{しら}氣^けきつた顔つきで、「いや二百株ばかり、それもごくありふれた、種類の悪い躑躅が植えてある^{あれち}荒地のような家敷^{やしき}跡ですよ」という。で、私は度々^{ひっこ}引込みのならない^は恥ずかしい思いをした。それで、まあ二人にでもなったならば思いきり立腹している風なところを見せようと考えていたのだけだ、——私達は^{いっしょ}一緒になつて間もなかったし、多少の遠慮^{えんりよ}が私をたしなみ深くさせたのであろうか、その男の白^{しら}々^{じら}とした物

云いを、私はいつも沈黙^{だま}つて、わざわざ報いるような事もしなかつた。

もともと、二人もの男の妻になつた過去を持っていて、——私
はかつての男たちの性根を、何と云つても今だに煤^{すす}けた標本のよ
うに、もうひとつの記憶の埒^{らち}内に固く保存しているので、今更
「何ぞ^{なん}かぞ」と云い合いする事は大変面倒^{めんどう}な事でもあつた。

二

二人目の男が、私を三人目の小松与一^{こまつよいち}に結びつけたについては

お前を打擲ちようちやくすると

初々と米を炊とぐような骨の音がする

とぼしい財布の中には支那しなの銅貨ドンペが一ツ
叩たたくに都合つごうのよい答むちだ

骨も身もばらばらにするのに

私を壁かべに突き当てては

「この女メたんぽぽが食えるか！」

白い露つゆの出たたんぽぽを

男はさきさきと噛かみながら

お前が悪いからだと

銅貨の答でいつも私を打擲する。

二人目の男の名前を魚谷一太郎と云つて、「俺の祖先は、渡り
者かも知れない。魚を捕^とつてカツカツ食つて行つたのであろう」
そういいながらも、貧^{びん}乏^{ぼう}をして何日も飯が食えぬと私を叩き、
米の代りにたんぽぽを茹^ゆでて食わせたと云うては殴^{なぐ}り、「お前は
どうしてそう下品な女のくせが抜^ぬけないのだ。衿^{えり}を背中までずつ
こかすのはどんな量見なんだ」と、そう云つて打擲し、全く、毎
日私の骨はガラガラと崩^{くず}れて行きそうで打たれるためのデクのよ
うな存在であつた。

私はその男と二年ほど連れ添^そつていたけれど、肋骨^{ろつこつ}を蹴^けられ

てから、思いきつて遠い街に逃げて行つてしまった。街に出て骨が鳴らなくなつてからも、時々私は手紙の中に壺円札をいれてやつては、「殴らなければ一度位は会いに歸つてもよい」と云う意味の事を、その別れた男に書き送つてやつていた。すると別れた男からは、「お前が淫売をした故、衿に固練の白粉もつけた故、美味いものもたらふく食べたい故、俺から去つて行つたのであらう、俺は今日で三日も飢えている。この手紙が着く頃は四日目だ、考えてみる」――

この華やかな都会の片隅に、四日も飯を食わぬ男がいる。働こうにも働かせてくれぬ社会にいつもペツペツと唾きを吐き、罵りわめいている男が……私はこのような手紙には何としても返事

が書けず、「あなたひとりに身も世も捨てた」と云う小唄こうたをうたつて、誤魔化ごまかして暮していた。

間もなく、魚谷と云う男も結婚けっこんしたのであろう、大変楽し気な姿で、細々とした女と歩いているのを私は見た事がある。ちやうど、そのおり、私は白いエプロンを掛かけていたので、呼び止めはしなかったけれど、私も早く女給のような仕事から足を洗わねばならぬと、地獄壺じごくつぼの中へ、働いただけの金を落して行く事を楽しみとしていた。

それから、——幾月いくつきも経たないで、正月をその場末のカフェーで迎むかえると、また、私は三度目の花嫁はなよめとなつていまの与一と連れ添い、「私はあれほど、一人でいたい事を願つていながら、

何と云う根氣のない淋しがりやの女であろうか」と云う事をし
じみ考えさせられていた。

三

「君は前の亭主ていしゅにどんな風ふうに叱ちられていたかね……」

与一は骨の無い方の鰯あじの干物ひものを口から離はなしてこういった。

「叱ちられた事なんぞありませんよ」

「無い事はないよ、きつときつい目に会あつていたと思うね」

私は骨つきの方の鰯あじをしゃぶりながら風呂屋ふろやの煙突えんとつを見てい

た。「どんなに叱ちられていたか」何と云う乱暴な聞き方であろう、

私は背筋が熱くなるような思いを耐^たえて、与一の顔を見上げた。
与一はくずぬいて箸^{はし}を嘗^なめていた。私は胃の中に酢^すが詰^{つま}ったよう
に、——^{まぶたは}瞼^{まぶた}が腫^はれ上つて来た。

「どうして、今更そんな事を云うの、私を苛^{いじ}めてみようと思うン
でしょう、——ねえ、どんなに貧乏しても苛^{いじ}めないで下^{くだ}さいよ、
殴らないでよね、これ以上私達豊かになろうなんて見当もつかな
いけれど、これ以上に食えなくなる日は、私達の上に度々あるで
しょうし、でも、貧乏するからと云つて、私の体を打擲^{うちげ}しないで
下さい。もしも、どうしても殴ると云うのなら、私は……また
あなたから離れなければならないもの、それに、私は今度殴られ
たら、グラグラした右の肋骨の一本は見事に折れて、私は働けな

くなつてしまふでしょう」

「ホウ……そんなに前の男は君を殴つていたのかね」

「ええこのボロカス女メと云つてね」

「道理で君はよく寝言ねごとを云つてゐるよ。骨が飛ぶからカンニンしてツ、そう云つて夢ゆめにまで君は泣いてゐるンだよ」

「だけど——けつして、別れた男が恋こいしくて泣いてゐるんじゃないでしょう。あんまり苛められると、犬だつて寝言にヒクヒク泣いてゐるじゃありませんか」

「責めてゐるわけじゃない。よつぽど辛つらかつたのだらうと思つたからさ」

「この鰺はもう食べませんか」

「ああ」

飯台が小さいためか、魚が非常に大きく見えた。頭から尻尾まである魚を飯の菜にすると云う事は久しくない事なので、私は与一の食べ荒らしたのまで洗うように食べた。与一は皿の上に白く残った鰺の残骸を見て驚いたように笑った。

「女と云う動物は、どうして魚が好きなのかね」

「男のひとは鰺が嫌いなンでしょう」

「鱗と云えば、お前が持って来た鯉の地獄壺を割ってみないかね、引越しの費用位はあるだろう」

「そうねえ、引越し賃位はね……でも八円のこの家から拾七円の

家じゃア、随分ずいぶんと差があるし、それに、昨日きのう行つて見たンだけれど、まるで狸たぬきでも出そうな家じゃありませんか」

「拾七円だつてかまうモンか、いい仕事がみつければそんなにビクビクする事もないよ」

「だって、あなたはまだ私より他にほか、女のひとと所帯を持った事がないからですよ。すぐ手も足も出なくなるだろうと私は思うのだけれど——」

「フフン、君はなかなか経験家だからね、だが、そんな事は云わンモンだよ」

与一との生活に、もつと私に青春があれば、きつと私は初々ういういしい女になったのだろうけれど、いつも、野良犬のらいぬのように食べる

事に^{あせ}焦る私である。また二階借りから、一軒^{けん}の所帯へと伸びて行く、——それはまるで、果てしのない沙漠^{さばく}へでも出発するかのよう^うに私をひどく不安がらせた。

四

風呂敷^{ふろしき}の中から地獄壺を出して、与一の耳の辺で振^ふつてみせた事が大きいそぶりであっただけに私は閉口してしまった。なぜなら、遠い旅の空で醤油飯しか食っていない、義父や母の事を考えると、私は古ハガキで、地獄壺の中をほじくり、銀貨と云う銀貨は、母への手紙の中へ札に替^かえて送ってやっていたのである。

いま、「割ってごらんよ」といわれると、中味が銅貨ばかりである事を知っている私は、何としても引込みがつかなく白状していった。

「割ってもいいのよ、だけれど……本当はもう銅貨ばかりになつていますよ」

「銅貨だつて金だよ、少し重いから貳参拾銭にさんじつせんはあるだろう」

この男は、精神不感性でもあるのかも知れない。風が吹ふいたほどにも眼めの色を動かさないで、茶を呑のんでいた。

「金と云うものは溜たまらぬものさ、——ああとうとう雨だぜ、オイ、弱ったね」

私は元気よく、柱へ地獄壺を打ちつけた。

ひめくりは六月十五日だ。

大安で、結婚旅立ちにいい日とある。

午後から雷鳴^{らいめい}が激^{はげ}しく、雹^{ひょう}のような雨さえ降って来た。

山国の産のせいであろう、まるで森林のように毛深い脚^{あし}を出し

て、与一は忙^{いそ}がしく荷造りを始めた。私はひどく楽しかった。男

が力いっぱい荷造りをしている姿を見ると、いつも自分で行李^{こころり}を

締^しめていた一人の時の味気^{あじけ}なさがい思い出されてきて、「とにかく

二人で長くやって行きたい」とこんなところで、——妙^{みょう}にあまく

なつてゆく。

私は塩たれたメリンスの帯の結びめに、
 庖^{ほう}丁^{ちよう}や金^{かな}火^ひ箸^{ばし}や、

大根^す播^{つゆじゃくし}り、露^{ひゆうりてき}杓^{いっさい}子^{はき}のような、非^は遊^{ゆう}離^り的^{てき}な諸^{しよ}道^{どう}具^ぐの一切^{いっさい}を挟^{はさ}んだ。また、私の懷^{ふところ}の中には箸^{しよ}や手^て鏡^{きやう}や、五^ご錢^{せん}で二^に切^きの鮭^{さけ}の切^き身^みなんぞが新聞紙^{しんぶんし}に包^くまれてひそんでいる。

「そんなにゴタゴタしないで、風呂敷^{ふろしき}へでも包^くんでしまえよ」

「ええでもこうやって、馬^ば穴^{けつ}をさげて行^いこうかと思^{おも}っているのよ」

私^{わたし}達^{たち}が初めて所^{しよ}帶^{たい}を持^もつた二^に階^{かい}借^かりの家^けから、その引^ひ越^こし先^{せん}の屋^や敷^{しき}跡^{あと}へは、道^{みち}程^{ほど}から云^いうと、五^ご丁^{てい}ばかりもあつたであらう。そ^その僅^{わず}か五^ご丁^{てい}もの道^{みち}の間^まには、火^か葬^{そう}場^ばや大^{だい}根^{こん}畑^{はたけ}や、墓^ぼや杉^{すぎ}の森^{もり}を突^つつ^つき切^きらない事^{こと}には、大^{だい}変^{へん}な廻^{まわ}り道^{みち}になるので、私^{わたし}達^{たち}は引^ひ越^こしの代^{しろ}を儉^{けん}約^{やく}するた^ため^めにも、その近^きい道^{みち}を通^{とお}つて僅^{わず}かな荷^に物^{ぶつ}を一^{いっ}ツ^つ一^{いっ}ツ^つ運^{はこ}ぶ事^{こと}にした。荷^に物^{ぶつ}と云^いつても、ビール箱^{ばいりく}で造^{つく}つた茶^{ちや}碗^{わん}入^いれと

腰こしの高いガタガタの卓テーブル子と、蒲団ふとんに風呂敷包みに、与一の絵の道具たぐいとこのような類であつた。

蒲団はもちろん私のもので、これは別れた男達の時代にはなかつたものである。浴衣ゆかたのつぎはぎで出来た蒲団ではあつたが、――母はこの蒲団を送ってくれるについて枕まくらは一ツでよいかと聞いてよこした。私は母にだけは、三人目の男の履歴りれきについて、少しばかり私の意見を述べて書き送つてあつたので、母は「ほんにこの娘むすめはまた、男ちこさんが違ちがうてのう」そのように腹きの中では悲しがつていたのであろうが、心を取りなおして氣を利かせてくれたのであろう、「枕は一ツでよいのか」と、書いてよこした。私は蒲団の中から出た母の手紙を見ると何ほどか恥ずかしい思いであつ

た。上流の人達と云うものは、恥ずかしいと云う觀念が薄いと云う事を聞いているけれど——母親であるゆえ、下^{しも}ぎまの者だから、なおさら恥ずかしいと思うまいと心がけても、枕の事は、今までに送ってもらっているとするならば、私はもう三ツ新しい枕を男のためにねだっている事になる。そう考えてゆくと、ジンとするほどな、悲しい恥ずかしさが湧^わいて来た。

そのころ、与一は木綿^{もめん}の掛蒲団一枚と熟柿^{じゅくし}のような、蕎麦殻^{そばがら}のはいつた枕を一ツ持っていた。私は枕がないので、座蒲団を二ツに折つて用いていたので、そう不自由ではなかったが、目立つてその座蒲団がピカピカ汚^{よご}れて来るのが苦痛であつた。それで枕は二ツいるのだらうと云つて寄こした母の心づかいに対して、私

は二ツ返事で欲しかったのではあつたが、枕は一ツでよいと云う風な、少々ばかり呆^ぼやけさせた思わせ振りを書き送つてやったのである。すると最も田舎風な、黒塗^{くろぬ}りの枕を私は一ツ手にした。死んだ祖母の枕でもあつたのであるうが、小枕が非常に高いせいか、寝ているのか起きているのか判^{わか}らないほど、その枕はひどく私の首にぴつたりとしない。

後、私は蒲団の事については、長々と母へ礼状を書き送つてやったのであるが、枕の事については、礼の一言も、私は失念したかの形にして書き添えてはやらなかった。

躑躅はもちろん、うつぎや薊あざみの花や桐きりの木が、家の周囲を取り巻いていた。この広い屋敷の中には、私達の家の外に、同じような草花や木に囲まれた平家ひらやが、円を描えがいたようにまだ四軒ほども並ならんでいた。

家の前には五六十本の低い松の植込みがあつて、松の梢こずえから透すいて見える原つばは、二百坪つばばかりの空地あきちだ。真中まんなかにはヒマラヤ杉が一本植っている。

「東京中探しても、こんな良い所は無いだろうね」

与一はパレットナイフで牡蠣かきのように固くなつた絵の具をバリバリとパレットの上で引掻ひっかきながら、越して来たこの家がひどく

気に入つた風であつた。

玄関げんかんの出入口と書いてある硝子戸ガラスどを引くと寄宿舎のように長い廊下ろうかが一本横つらぬに貫へいこういていて、それに並行して、六畳じようの部屋が三ツ、鳥の箱のように並んでいる。

「だけど、外から見ると、この家の主人は何者と判断するでしょうね、私はブリキ屋か、大工でも住む家のような気がして、仕方がないのよ」

「フフン、お上品でいらつしやるから、どうも似たり寄つたりだよ。ペンキ屋と看板出しておいたらいいだろう。——だが、こんな肩かたのはらない家と云うものは、そう探したつてあるモンじゃないよ。庭は広いし隣となりは遠いしねえ……」

「隣りと云えば、今晚は蕎麦を持って行かなければいけないのだけれど、どうでしょうか」

「幾つずつ配るもんだ？」

「そうね、三つずつもやればいいンでしょう」

引越した初めというものは、妙に淋しく何かを思い出すのだ。

私は何度となくこのような記憶がある。別れた男達と引越しをしては蕎麦を配った遠い日の事、——もう窓の外は暗くなりかけている。私は錯覚さつかくを払はらいのけるように、ふっと天てんじよう井を見上げた。

「オヤ、電気もまだ引いてないンですよ」

「本当だ、引込線も無いじゃないか、二三日は不自由だね」

長い間の習癖しゅうへきと云うものは恐ろしいものだ。私は立ち上る

と、人差指で柱の真中辺を二三度強く突いて見た。すると、私自身でも思いがけなかったほど、その柱はひどくグラグラしていて天井から砂埃すなぼこりが二人の襟足えりあしに雲脂ふけのように降りかかって来た。

「ねえ、これはあんた、潰つぶしにしたってせいぜい貳参拾円で買える家ですよ。どう考えたって、拾七円の家賃だなんて、ひどすぎるわ、馬鹿ばかだと思うわ」

与一は沈黙だまって、一生懸命いっしょうけんめい赤い鼻の先を擦こすっていた。「こ

の女は旅行に出ても、色々と世話を焼きたがる女に違いない。前の生活で質屋の使いや、借金の断りや、家賃の掛引かけひきなんぞには

並々ならぬ苦勞を積んで来たのであろう」与一はそんな事でも

考えていたらしく、ズシンと壁に背を凭せかけて言つた。

「僕はとてもロマンチストなんだからね、だが、君のどんなところに僕は惹かされたンだろう……」

そうむきになつて云われると、私はまた涙ぐまずにはいられな

かつた。「またこの男も私から逃げて行くのだろうか」男心と云

うものは、随分と骨の折れるものだ。別れた二人の男達も、あれ

でもない、これでもないと云つて、金があると埒もなく自分だけ

で浪費してしまつて、食えなくなるとそのウツプンを私の体を打

擲する事で誤魔化していた。

「ねえ、私のような女は、そんなに惹かされない部類の女なの？

だつて夫婦ふうふですものね、それに、私は誰からも金を送つてもら
 う当あてはないし……」

与一は二寸ばかりの黄色い蠟燭ろうそくを釘箱くぎの中から探し出すと、
 灯をつけて台所のある部屋へやの方へ疳かん性しょうらしく歩いて行つた。
 真中の暗い部屋に取り残された私は、仕方なく濡ぬれた畳たたみに腹はら這ばつ
 て、袖そでで臉をおおい、「私だつてロマンチストなのよう」と何と
 なく声をたてて唄つてみた。

六

長いこと、人間が住まなかつたからであらう、部屋の中は馬糞ばふ

紙んしのような、ボコボコした古い匂においがこもっていて、黒い畳の縁には薄かく黴あびの跡あとがあつた。

「おい、隣りだけでも蕎麦を持って行つといた方が都合がいいぜ、井戸いどが一緒らしいよツ」

カツンカツン鴨居かもいに何かぶつつけながら与一は不興氣に私に呶ど鳴なつた。

私は参拾銭の蕎麦の券を近所の蕎麦屋から一枚買つて来ると、左側の一軒目の家へ引越しの挨拶あいさつに出向いた。

隣りと云つても、田舎風にポツンポツンと家の間に灌木かんぼくが続いているので、見たところ一軒家も同然のところである。私は何

度も水を潜^{くぐ}つて垢^{あか}の噴^ふき出たようなネルの単衣^{ひとえ}を着て、与一のバ
ンド用の、三尺帯をぐるぐる締めていた。

「何をする人だろう」と考えるに違いない。尋ね^{たず}な場合は、「絵
の先生をしています」とでも濁^{にご}しておこうと、私は私の家と同然
な御出入口と書いてあるその硝子戸を引いた。

この家の主^{あるじ}は、よつぽど白い花が好きと見えて、空地と云う空
地には、早咲^{はやざき}きの除虫菊^{じよちゆうぎく}のようなのが雪のように咲いていた。
家根^{やね}の上から白い煙^{けむり}があがっている。

花の蔭^{かげ}では、蛙^{かえる}が啼^なくから帰ろうと歌って、男の子がポツンと
ひとりで尿^{いばり}をしている。

一軒だけ挨拶を済まして帰つて来ると、与一は、私が買つて来ておいた、細い壺銭蠟燭に灯をつけて台所に続いた部屋の壁に何かベタベタ張りつけていた。

家の中はもう真暗だ。

「何をする人なんだ？」

「煙草専売局の会計をしてるンですつてよ」
たばこ

「ホウ、固い方なんだね」

土色の壁にはモジリアニの描いた頭の半分無い女や、デイフィの青ばかりの海の絵が張つてあつた。

こんな出鱈目な色刷でも無聊な壁を慰めるものだ。
でたらめ
灯が柔い
ぶりよう
なぐさ

せいか、濡れているように海の色などは青々と眼にしみた。

「その隣りが気合術診療所よ」
しんりようじょ

「へエ、どんな事をやるンかね」

「私一人でこの家を見に来た時、気合術診療所の娘が案内してくれたのよ、とてもいい娘だわ」

「そう云えば、僕もあの娘が連れて来てくれたんだが、俺ンところと同じようなもんらしい、瓜、うり、トマト、なす茄子の苗売りますなんて、木の札ふだが出てるあそこなんだろう」

与一が灯を持って、三ツの部屋を廻るたび、私はまるで蛾がのようにくつついて歩いた。右側の坊主ぼうず置の部屋には、ゴツホの横向きの少女が、おそろしく瘦やせこけて壁に張りついている。その下

には簞笥たんすの一ツも欲しいところだ。この部屋は寢室しんしつにでも当てるにふさわしく、二方が壁で窓の外には桐の枝えだがかぶさり、小里万造氏の台所口が遠くに見えた。

真中の部屋はもちろん与一のアトリエともなるべき部屋であるが、四枚の障子しょうじが全部廊下を食っているので、三ツの部屋の内では、一番そうぞうしい位置にあつた。

与一は、この部屋に手製の額に入れた自分の風景画を一枚飾かざりつけた。あんまりいい絵ではない。私はかつて、与一の絵をそんなに上手じょうずだと思つた事がない。それにひとつは私は、このように画面に小さく道を横に描くことはあんまり好きでないからかもしれない。「私は道のない絵が好きなんだけれど」そうも言つて

みた事があるけれど、与一はむきになって、茶色の道を何本も塗りたくつて、「君なんか絵がわかつてたまるもんか」と、与一はそう心の中で思っているのかも知れない。

七

山は静かにして性をやしない、水は動いて情を慰む、静動二の間にして、住家を得る者あり、私は芭蕉ばしょうの洒落堂しゃれどうの記と云う文章の中に、このようにいい言葉があると与一に聞いた事がある。そんなによい言葉を知っている与一が、収入の道と両立しない、法外もなく高い家賃で、馬かなんぞでも這入つて来そうな、こん

な安住の出来そうもない住家に満足している事が淋しかった。

台所の流しの下には、根笹ねざさや、山牛蒡やまごぼうのような蔓草つるくさがはびこつていて、敷居しきいの根元ありは蟻ありの巢すでぼろぼろに朽くちていた。

「済みませんねえ。疲つかれていなかったら台所へ棚たなを一ツ吊つるして下さい」

「棚なんか明日にして飯にでもしないか」

「ええですけど何も棚らしいものがないから、どうにも取りつき場がないわ」

「眼まが舞いそうだ。飯にしよう」

与一が後ろ鉢巻はちまききを取りながら、台所へ炭箱さを提さげて来た。鮭さけが二切れで米が無い。

それで、与一が隣りの部屋に去ると、私は暗がりの中に、割りそこなつた鯉の地獄壺を尻尾の方から石でもつてコツンコツンと割つてみた。

脆い土屑もちくずがボロボロ前掛けの上に壊れて、膝の上に溢れた銅貨は、かなりズシリと重みがあつた。どれを見ても銅貨のようだ。私は一ツ一ツ五拾錢銀貨が一枚ぐらい混ざつてはいはしないかと、膝の上にこぼれた錢の縁を指で引搔いて見た。

銅貨がちようど二十枚で、拾錢の穴明き錢と五拾錢銀貨が一枚ずつ、私の胸はしばらくは子供のように動悸どうきが激しかった。

抜き替えたこの一錢銅貨がみんな五拾錢銀貨であつたならば、拾円以上にもなっているであろう——私は笊ざるを持つと、暗がりの

多い町へ出て行つた。

軒のきの低い町並みではあるけれど、割合と色々な商い店が揃そろつていて、荷箱のように小さい、鳩はとと云う酒場などは、銀座を唄つたレコードなんかを掛けていたりした。

その町の中ほどには川があつた。白い橋が架かつてゐる。その橋の向うは、郊外こうがいらしい安料理屋が軒を並べていて、法華寺ほっけじがあると云う事であつた。

私は米を一升しょうほどと、野菜屋では、玉葱たまねぎに山東菜さんとうなを少しばかり求めて、猫ねこの子でも隠かくしているかのように前掛けでくると巻くと、何度となく味わつたこれだけあれば明日いっぱいはと云う心安さや、またそんな事をいつまでも味わつて暮さなければな

らなかつた度々の男との記憶——いつそ、どこかに突き当つて血でも吹き上げたならば、額でも割つて骨を打ち砕いたならば、進んで行く道も判然とするであろう。仕事をするためにか、食べるためにか、どんなために人間は生きているのであろうか、私は毎日が一時^{しの}凌ぎばかりであるのが、だんだん苦痛になつて来ていた。手探りで枳^{からたち}の門を潜ると、家の中は真暗で、台所の三和土^{たたき}の上には、七輪の炭火だけが目玉のように明るく燃えていた。

「どこへ行つていたんだ？」

「私、ねえ……お米が無かつたから、通りへ行つていたのよ」

「米を買いに？　なぜそう早く云わないんだ。もう動けないよッ」
与一は大の字にでも寝ているらしく、そういいながら、転々と

畳をころがっているようなけはいがしている。

「早くそう云うつもりで云いそびれたのよ、……すぐ焚^たけるからねえ」

「うん、——あのね、何も遠慮する事はないんだよ。金が無かつたら無いようにハッキリ云いたまえ。ハッキリと云えばいいんだ。……俺は明日上野の博覧会にでも廻ってみよう。ペンキ屋の仕事のこぼれが少しはあるだろうと思うんだ。働かないで絵を描いて行こうなんて虫が良すぎる。そうだよ！ 芸術だの、絵だのって、個人の慰みもんだアね、俺なんかペンキで夏のパノラマでも描いて、田舎の爺^{じい}さん婆^{ばあ}さんに見てもらった方が相当なンかも知れないよ、それが似合っているんだ」

「あなた、私を叱っているんですか？」

「叱つて。叱つてなんかいないよ、だから厭いやなんだ、君はひねくれない方がいい。——僕が君に云つたのは貧乏人はあんまり物事をアイマイにするもんじゃないと云う事だ。遠慮なんか蹴飛ばしてハッキリと、誰にだつて要求すればいいじゃないかッ！ ヒクツな考えは自分を墮落だらくさせるからね」

米を洗っていると泪が溢れた。

卑屈ひくつになるなど云つた男の言葉がどしんと胸にこたえてきて、いままでの貞女ていじょのような私の虚勢きよせいが、ガラガラと惨めみじに壊れて行つた。

与一はあらゆるものへ絶望を感じている今の状態から自分を引

きずり上げるかのような、まるで、答のようにピシピシした声で叫んだ。^{さけ}

「今時、^{おぼ}溺れるものが無ければ生きて行けないなんて、ゼイタクな気持ちは清算しなければいけないんだ。全く食えないんだから……」

「食わなくなつたって、溺れていた方がいいじゃないの……」

「君はいつたい何日位飢える修養が積ンであるのかね、まさか一年も続くまい」

清朗な日が続いた。

井戸端いどばたに植えておいた三ツ葉の根から、薄い小米のような白い

花が咲いた。

壁のモジリアニも、ユトリオもデイファイも、おそろしく退屈な色に褪さめてしまつて、私は、与一が毎朝出掛けて行くと、一日中呆んやり庭で暮らした。

人気のない部屋の空気と云うものはいつも坐すわっている肩の上から人の手のように重くのしかかつて来る。まして家具もなく、壁の多い部屋の中は、昼間でも退屈で淋しい。

青い空だ。

白米のような三ツ葉の花が、ぬるく揺れている。

「小母さんはどうして帯をしないのウ」

蛙の唄をうたった小里氏の男の子が、こまつしやくれた首の曲げ方をして、私の腰のあたりを不思議そうに見ている。

「小母さんは帯をすると、頭が痛くなるからねえ」

「フン、——僕のお父ちゃんも頭が痛いのに」

私は、青と黄で捻ったしで紐で前を合わせていた。——ああ、疲れた紅いメリンスの帯はもうあの朝鮮人の屑屋の手から、どこかの子守女へでも渡っている事だろう。帯を売って五日目だ。もう今朝は上野へ行く電車賃もないので、与一は栗色の自分の靴をさげて例の朴のところへ売りに行つた。

「何ほどつて？」

「六拾銭で買ってくれたよ」

「そう、朴君はあの靴に四ツも穴が明いているのを知っていたんでしょか？」

「どうせ屋敷めぐりで、穴埋めさ、味噌汁吸って行けつてたから呑んで来た」

「美味かった？」

「ああとても美味かったよ……六拾銭置いとくから、何か食べる
といい」

私は今朝から六拾銭を握ったまま呆んやり庭に立っていたのだ。
松の梢では、初めて蝉がしんしんと鳴き出したし、何もかもが眼

に痛いような緑だ。

唾を呑み込もうとすると、舌の上が妙に熱っぽく荒れている。何か食べたい。——赤飯に支那蕎麦、大福餅だいふくもちにうどん、そんな拾銭で食べられそうなものを楽しみに空想して、私は二枚の拾銭白銅をチリンと耳もとで鳴らしてみた。

しんしんと蝉は鳴いている。

透すけた松の植込みの向うを裸はだかうま馬うまが何匹びきも曳ひかれて通る。

「良いお天気で……」

屑屋の朴はかりが秤はかりでトントントン首筋を叩きながら、枳の門の戸を蹴飛ばして這入って来た。

「朴さん、あの靴、穴が明いていたでしょうに……」

「よろしいよ。どうせ屋敷で儲けるからねえ」

「助かりましたわ」

「よろしいよ。小松さんは帰りは遅い^{おそ}ですか？」

「ええいつも夜になってから……」

「大変ですな。——ところで、石油コンロ買いませんか、金は三度位でよろしいよ」

「ええ……どの位ですウ」

「九拾錢でよろしいよ。元々、便利ですよ」

朴は冷々と気持ちがいいのであろう、玄関の長い廊下に寝そべつて、私が石油コンロを鳴らしている手附^{てつき}を見ていた。大分、錆^さびつ附^{びつ}いてはいたけれど、灰色のエナメルが塗ってあつて妙に古風だ。

心^{しん}に火をつけると、ヴウ……と、まるで下降している飛行機^{うな}の唸^{うな}りのような音を立てる。

「石油そんなに要^いりません。一罐^{かんみつぎ}三月もある。私の家もそう」

石油コンロを置いて朴が帰ると私はその灰色の石油コンロを、台所の部屋の窓ぎわに置いて眺めた。家具と云うものは、どうしてこんなに、人間を慰めてくれるのだろう。

夕方井戸端で、うどんを茹^ゆでた汁を捨てていると、小里氏の子供が走って来て空を見上げた。

「ねえ、小母さん！ 飛行機が飛んでらア」
「どこに？」

「ホラ、音がするだろう……」

私は、空を見上げている子供の頭を撫なでていった。

「小母さんところの石油コンロが唸うっているのよ、明日お出いで、見せて上げるから……」

そういつて聞かせても、子供は、（炭や薪まきで煮焚にたきしているの
であろう、小里氏の屋根の煙を私は毎日見ている）不思議そうに
薄暗い空を見上げて、「飛行機じゃないの」といつていた。

九

与一は日記をつけることがこまめであつた。私であつたら、馬

鹿らしく、なにも書かないでいるだろう、そんな無為に暮れた日でも、雨だの、晴れだの与一は事務のようにかき込んでいた。

雨だの晴れだのが毎日続くと、与一自身もやりきれなくなってしまうのか、ついには「蚊帳が欲しい」とか「我もし王者なりせばと云う広告を街で見える」そんな事などが書き込まれるようになった。

だが飢える日が鎖のように続いた。もうこまめな与一も日記をほうりっぱなしにして薄く埃をためておく事が多くなった。

そうして、日記の白いままに八月に入つたある朝、——跌ずいた夢でも見たのであろう、私は眼が覚めると、私はいつものように壁に射した影を見ていた。浅黄色の美しい夜明けだ。光線がま

だ窓の入口にも射していない。

その時、私は新しげな靴の音を耳にした。「まだ五時位なのに誰だろう」そんな事を考えながら、襖ふすまを押して庭の透けて見える硝子戸のぞを覗くと、大きな赭あから顔の男が何気なく私の眼を見て笑った。背筋の上に何か冷いものが流れた気持ちであつたが、私も笑つてみせた。

「小松君起きてるウ？」

「随分早いですね、ただ今起します」

朝の光線のせいかな、何もかも新しいものをつけている紳士しんしが、このように早く与一を尋ねて来ると云う事は、よっぽど親しい、遠い地からの友人であろうと、私は忙がしく与一を揺り起した。

「そんな友人無いがね、小松って云ったア？」

「ええ、起きているかって笑って云っているのよ」

「変だなア」

与一が着物を着ている間に、私は玄関の鍵かぎを開けた。

すると、どうであろう、四五人の紳士達が手に手に靴を持ったまま、一本の長い廊下を、何か声高く叫びながら、三方に散って行つた。驚いて寢室に逃げこむ私の後からも、二人の紳士が立ちはだかつて叫んだ。

「君が小松与一君かね？」

与一も面喰めんくらつたのだろう、唇くちびるを引きつらせてピクピクさせていた。

「ちよつと、署まで来てもらいたい」

「へえ、……いったい何ですウ、現行犯で立小便位なら覚えはあるンですが、原因は何んですウ」

「そんなに白っぱくなくてもいいよ」

「君は小松与一だろう？」

「そうですよ。小松与一と云うペンキ屋で、目下上野の博覧会でもって東照宮の杉の木を日慣らし七八本は描いていますよ」

「フン君が絵を描こうと描くまいと、そんな事はどうでもいいんだ、一応来てもらいたい」

「思想犯の方ですか？——僕は今ところは臨時雇いで、今日行かないと、また、外の奴に^{やつ}取られツちまうんですがね」

「まあ、男らしく来て、一応いい開いたらいいだろう」

「何時間位かかるンですか？ 長くかかるンじゃないンですか？」
落ちついたのか与一は脣を弛めて笑い出した。

「二十九日だなんて事になると厭だから、こんなモンでもお見せ
しましう」

そういつて押入れの中から、与一は召集しょうしゅう令状を出して見せた。

「本当に何か人違いでしょう？ 僕はこの月末はこうして、三週間兵隊に行くンですがね」

他の二ツの部屋を調べた紳士諸君も呆んやりした顔で、
「オイ、どうも人違いらしいぜ」

「そんな事はない。この男だよ、僕は確証を得ているんだ」

「そうかねえ、でもちよつとおかしいよ君、——君、この与一は雅号^{がごう}ではないだろうね。本名は小松世市、こう書くんだろう」

「だから、召集令状を見たらいいでしょう」

一枚の小さな召集令状が、あつちこつちの紳士諸君の手に渡つた。

「不思議だねえ、もいちど探しなおしだ。ところで、他に^{ほか}客は無いだろうね」

枳の門の外には、白い小型の自動車が待っていた。仕入れに行く魚屋や、新聞配達等が覗いている。

「チエツ、何のために月給貰^{もら}っているんだ。おいッ！ 加奈代、

塩を撒^まいてやれ」

「だって、塩がないのよ」

「塩が無かつたら泥^{どろ}だつていいじゃないかッ、泥が無かつたら、石油でもブツかけろ」

「こんなに家中無断で引掻^{ひっか}きまわして、済みませんなんて云わないッ」

「云うもんか……あんなのを見ると、食えないで焦^{いら}々しているところだ、赤くなりたくもなるさ」

「小さい頃、私の義父^{とう}さんも、路傍に店を出して、よく巡査^{じゅんさ}にビンタ殴られていたけれど——全く、これより以上私達にどうし

ろって云うのかしら？」

十

上野の博覧会の仕事もあと二三日で終ると云う夕方、与一は頭中を繃^{ほうたい}帯で巻いて帰って来た。

「八方塞^{ふさが}りかね。オイー！ 暑いせいか焦々して喧嘩^{けんか}しちまったよ」

「誰とさア」

「なまじつか油絵の具を捏^こねた者は、変な気障^{きざ}さがあつて困るつて、ペンキ屋同士が云つてゐるだろう、だから、僕の事なンですか、

僕の事なら僕へはつきり云つて下さいって、云つてやったんだ。

するとね、あちんぴら絵描きは骨が折れるつて云つたから、何をお高く止つてるんだ馬鹿野郎、ピンハネをしてやがつてと呶鳴つてやったら、いきなりコップを額にぶつつけたんだ」

「マア、まるで土工みたいね、痛い？」

「硝子がいってたけど大丈夫だいじょうぶだろう」

バンド代りに締めた三尺帯の中から、与一は十三日分の給料を出していった。

「日当貳円五拾銭だちつて、こうなると、五拾銭引いてやがる。

おまけに、会場の方は俺達の分を四円位にしはといてピンを刎ねるんだから、やりきれないさ」

それでも、参拾円近い現金は、ちよつと胸がドキリとするように嬉^{うれ}しかった。

「でも、故意に喧嘩して、止め^やさせるンじやないの？」

「そうでもないだろうが、皆^{みな}不平を云いながら、前へ出るとペコペコしてるンだからね」

「そんなものよ」

ひき^{ひき}久し振りに石油を一升買^ぶつた。

灰色の石油コンロは、円^{まる}い飛行機のような音をたてて威勢^{いせい}よく鳴っている。

二人は庭へ出て水を浴びた。

あおぐろ

黝くなつた躑躅の葉にザブザブ水を撒いてやりながら、何気なく与一の出発の日の事を考えていた。

「もう後六日で兵隊だねえ……」

「ああ」

「留守はどうしよう」
るす

「参拾円近くあるじゃないか、俺の旅費や小遣こづかいは五円もあればいいし、家賃は拾円もやつとけば、残金で細々食えないかい？」

「そうだね」

気合術診療所から貰つて来たトマトの苗が、やつと三ツばかり黄色い花を咲かせていた。あの花が落ちて、赤い実が熟する頃は歸つて来るのだろう。——私一人で何もしない生活の不安さや、

醬油飯の弁当を持って海兵団へ仕事に行っていた義父が、トロツ
コで流されたという故郷からの手紙を見て、妙に暗く私はとらわ
れて行つた。

唐津^{からつで}出来の茶碗^{ちやわん}や、皿^{さら}や井^{どんぶり}などを、座^{ござ}を敷いて、「どいつも
こいつも、茶碗で飯を食わねんだな、ホラ唐津出来の茶碗だ。五
ツで二分と負けとこう、これでも驚かなきや、ドンと三貫^{かん}、ええ
ツこの娘もそえもんで、貳拾五錢、いい娘だぜ、髪が赤くて鼻た
らし娘だ！」

私は、長崎^{ながさき}の石畳の多い旧波止場で、義父が支那人の繻子^{しゆす}売
りなんかと、店を並べて肩^{かたはだ}肌^{はだ}抜いで唐津の糶^{せり}売りしているのを

思い出した。黄色いちゃんぽんうどんの一杯ばいを親子で分けあった長い生活、それも、道路妨害ぼうがいとかで止めさせられると、荷車を牽ひいて北九州の田舎をまわった義父の真黒に疲れた姿、——私は東京へ出た四年の間に、もう貳拾円ばかりも、この貧しい両親から送金を受けている。

結局、義父たちが佐世保に落ちついてもう一年になるけれど、海兵団のトロ押しが、とうとう義父の働く最後であったのかも知れない。

暗雲やみくもにヒツパクした故郷からの手紙だ。

——それで、おまえが、なんとかなれば七円ほど、くめんを

して、しきゆう、たのむ、おとっさんも、いたか、いたか、きつてくれ、いいよんなはる。せきたんさんで、あらいよつとじやが、びよういんにいったほうが、よかあんばいのごとある。

私は夕飯の済んだ後、与一に故郷からの手紙を見せようと思つた。与一は何か考えているのであろう、何となく淋しそうに窓に凭れて唄をうたっていた。その唄の節はひどく秋めいた、憂^{ゆうしゆ}愁^うのこもったものであつた。私は何度となく熱い茶を啜^{すす}りながら、手紙を出す機会を狙^{ねら}っていたが、与一はいつまでもその淋し気な唄を止めなかつた。

十一

沈黙^{だま}つて故郷へは送金しよう、——私はそう思つて毎日与一の額の繃帶を巻いてやった。

「ちよつとした怪我^{けが}でも痛いんだから、これで腕^{うで}や脚^{あし}を切断するとなると、どんなでしょう？」

「それはもう人生の終りだよ、俺だったら自殺する」

「働かないとなると、生きていても仕様がなからね……」

与一が、山の聯隊^{れんたい}へ出発した日は、空気が灰色になるほど風が激しかった。「まるで春のようだ、気持ちの悪い風だ」誰もそ

ういいながら停車場に集った。

「石油コンロは消してあつたかい？」

与一は、こんな事でもいうより仕方がないといった風に、私の顔を見て笑った。

奉公袋^{ほうこうぶくろ}を提^ひげて下駄^{げた}をはいた姿は、まるで新聞屋の集金係りのようで、私はクツクツと笑い出して、「火事になった方がいいわ」と、言葉を誤魔化^{ごまか}した。

「一人で淋しかったら、診療所の娘でも来てもらうといい」

「大丈夫ですよ、一人の方が気楽でいいから……」

与一に対して、何となく肉親のような愛情が湧^わいた。かつての二人の男に感じなかった甘^{あま}さが、妙に私を泪もろくして、私は固

く二重顎^{あご}を結んで下を向いた。

「厭^{いや}なつちやう、まったく……」

私は甘いものの好きな与一のために、五銭のキャラメルと、バナナ^{ふさ}の房^{ふさ}を新聞に包んで持たせてやった。

「どうせ今晚は宿屋へでも泊^{とま}るンでしよう？」

「知った家はないし、どうせ兵營の傍の木賃泊りだ」

「召集^{ひさん}されて随分悲惨な家もあるンでしようね」

「ああ百^{ひやく}姓^{しやう}なんか収^{しゆう}穫^{かく}時^{とき}だ、實際困るだろう」

海水浴場案内のビラが、いまは寒気にビラビラ^{すそ}して、駅前^ほを行く女達の薄着^{はく}の裾^{すそ}が帆^ほのようにふくれ上っていた。

拡声機は発車を知らせている。

「元氣でいるンだよ」

長いホームを歩いている間中、与一は同じ事を何度も繰り返した。私は、そんな優しい言葉をかけられると、妙に胸が詰った。で、いかにも間拔けた女らしく見せるべく、私は頬つぺたをふくらまして微笑^{ほほえ}んでみせた。頬^ほをふくらましていると、眼の内が痛い。私はじつと脣をつぼめて、与一が窓から覗くのを待った。

山へ行く汽車は煤^{すす}けたままで、バタバタ瞼^{まぶた}のように窓を開けた。窓が開くと、たくさんの見送りが、蟻のように窓に寄った。与一は網^{あみ}棚^{だな}の上に帽子^{ぼうし}と新聞包みを高く差し上げている。咽喉^{のど}仏^{ぼとけ}が大きく尖^{とが}つて見えた。その逞^{たくま}しい首を見ると、耐えていた泪が鼻の裏にしみて、私は遠い時計の方を白々と見るより仕方が

なかった。

「おいッ！」

与一はもうキャラメルを一つむいて、頬ばったらしく、口をもぐもぐさせて私を呼んだ。

「何？」

「キャラメル一ツやろう」

誰も私達の方を向いてはいなかった。与一の座席は洗面所と背中合せなので気楽に足を投げ出して行けるだろう。与一は思い出したように指を折って、「三七、二十一日もかかるンかね」一人でつぶやいてうんざりしたかの風であった。

「誰も見てくれるモンが無いンだから、病気をせんように、気を

つけるんだぞ」

私は汽車が早く出てくれるといいと念じた。焦々した五分間であった。その辛い^{つら}気持ちをお互い^{たが}にぎつくばらんにいえないだけに、余計焦々して私はピントを合せるのに、微笑の顔が歪^{ゆが}みそうであつた。

十二

一人になったせいであろう。昼間でも台所の部屋などは、ゴソゴソと穴蔵^{こおろぎ}が幾つも飛んでいた。与一が出発して九日になる。山から来た最初の絵葉書には、汽車が着いて、谷間の町の中を、

しかも、夜更けて宿を探すに厭な思いをしたと書いてあつた。

第二番目の葉書には、松本市五〇聯隊留守隊、第二中隊召集兵、小松与一宛あてと住所が通知してあつた。

三番目の絵葉書は、高原の白樺しらかばが白く光つて、大きい綿雲の浮ういた美しい写真であつた。文面には、「今日は行軍で四里ばかり歩いた。田舎屋で葡萄ぶどうを食べて甘美うまかつた。皆百姓は忙がしそ
うだ。歩いていると、呑気のんきなのは俺達ばかりのような気がして、何のために歩いているのか判らなくなつて来る。こうしていても、気が気でないと云う男もいた。留守はうまくやって行けそうか。知らせるがいい」こんな事が書いてあつた。

私は徒爾いたずらな時間をつぶすために、与一の絵葉書や手紙を、何

度となく読んでまぎらした。あの下駄はどう処分したであろうか、逞しい軍人靴をはいて、かえつて、子供のように楽しんでいるかも知れない。出発の日の与一の侘^{わび}しい姿を思うと、胸の中が焼けるように痛かった。

第四番目の手紙は、どうも俺は、始終お前に手紙を書いているようだ。お前は甘い奴と思うかも知れない。——遠く離^{はな}れて食べる事に困らないと、君がどんな風に食べているんだろうと云う事が案ぜられるのだ。まだ一度も君から手紙を貰っていない。君もこれから生活にチツジョを立てて、本当に落ちついたらいいだろう。落ちつくと云う事は、ブルジョアの細君^{まね}の真似をしると云うのではない。俺と君の生活に処する力を貯^{たくわ}える事さ。金のある奴

達は酒保へ行く。無いものは班にいて、淋しくなると出鱈目に唄をうたう。唄をうたう奴達は、収穫を前にして焦々しているのだろう。俺の隣りのベッドに舩^{ふな}大工^{だいく}がいる、子供三人に女^{にようぼう}房を置いて来たと云つて、一週間目に貰った壺円足らずの金を送つてやっていた。そんなものもあるのだ。マア元気でやつてくれるように、小鳥が飼^かつてあるとか、花でも植えてあるならその後成長はどんな風かとも聞けるが、そこには君自身の外に、何も無いんだからね。——元氣^{たの}で頼む」

かつて知らなかった男の杳々^{ようよう}とした思いが、どんなに私^{なみだ}を涙^{なみだ}つぽく愛^{かな}しくした事であらう。

私は手鏡へ顔を写してみたりした。「お前も流浪^{るろう}の性じゃ」と

母がよく云い云いしたけれど、二十三と云うのに、ひどく老け込んで、唇などは荒^すさんで見えた。瞼には深い影がさして、あのように誇^{ほこ}っていた長い睫^{まつげ}も、抜けたようにささくれて、見るかげもない。

紅^{べに}もなければ白粉^{おしろい}もない、裸のままの私に、大きい愛情をかけてくれる与一の思いやりを、私は、過去の二人の男達の中には探し得なかった。それに、子供の頃の母親の愛情なんかと云うものは、義父のつぎのもののようにさえ考えられ、私は長い間、孤独^{どくどく}のままにひねくれていたのだ。

五番目の手紙には、「まだ、お前の手紙を手にしな。君は例

の変な義理立てと云った風なものに溺^{おぼ}れているのだろう。もう二年もたったらそれがどんなに馬鹿らしかったかと解^{わか}るだろうが、そんな古さは飛び越える決心をして欲しい。君は、僕に、なるべく悪い事を聞かすまい、弱味を見せまいとしているらしいが、そんな事は吹けば飛ぶような事だ。マア、とにかく困^{しゅうへき}った習癖だと云っておこう。同封^{どうふう}の金は、隊で貰ったのと、東京を出る時、旅費や宿料の残りだ。僕は壺銭もなくなつた。だが生きるよくなものは食っている。困らない。山は快晴だ」

第六番目の手紙、「君は僕の心の中で、だんだん素直に成長して行く。手紙は読んだ。一字も抜かさないように読んだ。君のよう^{そうそう}に忽々と読むのではない。君の姿を空想して読むのだ。僕の

送った貳拾円ばかりの金が、よつぽど^{こた}応えたらしいが、何かあるのだろうとは思っていた。——お母さん^{かあ}へ拾五円送ったつて、そんな事を僕が怒^{おこ}ると思つたら、君は僕の事について認識不足だよ。僕からも、佐世保へ手紙を出しておこう。君は働きたいとあるが、それもいいだろう。

貳円ぐらいでは十日も保つまいし、ただ女給と云う商売は絶対に反対だ。威張る商売ではない。僕は色々の事を兵營で考えさせられた。——ところで、こんな甘いことも時に考える。二人で佐世保へ新婚旅行ぐらいしてみたいとね。兵營の中は殺風景で、寝ても起きてても女の話だ。僕もそろそろ君への旅愁がとつき始めた。十日すれば会える。女給以外の仕事であつたら、元気に働い

て生きていてくれ。小里氏が気が狂ったそうだが、気の毒な隣人は大いに慰さめてあげる事だ」

トマトの花が落ちて、青い実を三ツ結んだ。かつてなかった楽しさが、非常に私を朗らかにした。私は与一の手紙が来てから、朴の紹介で、気合術診療所の娘と、朝早く屑市場へ浅草紙を造る屑を扱りに通った。

ひごよみ 日曆を一枚一枚ひっぺがしては、朝の素晴しく威勢のいい石油コンロの唸りを聞いて、熱い茶を啜る事が、とても爽やかな私の日課となった。

第七番目、第八番目、第九番目、山の兵營からの手紙は頬を染めるような文字で埋^{うま}っている。——吾^{われ}木^も香^{かう}すすきかるかや秋くさの、さびしききしみ、君におくらむ。とても与一の歌ではあるまい。だが眼の裏に浸^しみる歌のひとふしではあった。

（昭和六年十一月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系69」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「改造」

1931（昭和6）年11月

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

清貧の書

林芙美子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>